

地域シンポジウムの成果普及と今後のIT活用について

和歌山県立紀央館高等学校 副校長 小山宣樹

koyama@kiokan-h.wakayama-c.ed.jp

キーワード：IT活用、地域シンポジウム

1. はじめに

平成18年11月和歌山県で開催された「先進IT活用教育シンポジウム in 和歌山」は、平成18年度教育情報化促進基盤整備事業の普及・啓発活動の一環として、初等中等教育におけるITの有効活用とITリテラシーの向上を図ることを目的に実施された。その成果普及と今後のIT活用について、本県の学校、行政、企業等からの発表者にインタビューを行った。ここにその概要を報告するとともに、このような地方開催シンポジウム（以下、地域シンポジウムと言う。）の意義について考えてみたい。

2. 成果普及と今後のIT活用

2.1 和歌山市の学校情報セキュリティの取組（和歌山市立教育研究所 角田佳隆）

（1）概要

平成19年度は、セキュリティ意識の向上のため、情報教育担当者、管理職、教職員を対象に情報モラル、情報セキュリティの研修を実施した。また、スパムメール対策、不正アクセス防止等の強化を行い、ネットワーク環境の安全性を高めた。個人認証システムについては、USB認証キー及びファイル暗号キーを管理職、役職者等に配付した。今後全員に配付する予定である。セキュリティポリシーの見直しについては、教育委員会レベルではできているが、現在、学校現場とのすり合せを行っている。また、小学校にタブレットPCを配付し、基礎学力の向上を図っている。中学校では、平成23年端末の入れ替えが予定されている。これに併せ、センター設備を所有せず、ASPサービスの導入を考えている。

（2）地域シンポジウムの意義

地域シンポジウムによって一般の教員にもセキュリティや情報モラルの重要性を知ってもらうきっかけとなった。また、各地の取組の様子を知ることで、意識の向上につながった。

2.2 きのくにeラーニングシステムを活用した教材研究（広川町立南広小学校 上田敏樹）

（1）概要

和歌山県教育センター学びの丘ではきのくにeラーニングシステムを教員研修に生かしている。この取組は、小学校・中学校国語科グループが「書く」領域を中心に児童生徒が言語を使って表現したくなるような教材の研究を行ったものである。平成19年度、和歌山県教育センター学びの丘では、きのくにeラーニングシステムを英語集中研修、初任者研修の課題研究、情報・理科・社会等の専門研修等の他、教育iDC（インターネットデータセンター）等にも活用を広げている。本システムは、インターネットエクスプローラ（IE）をインターフェイスとしているため、受講者の広がり期待できるが、新たなOSへの対応等が課題となっている。

（2）地域シンポジウムの意義

きのくにeラーニングシステムを活用した教材研究について広く参加者に知っていただくとともに、今後の現職教育や共同研究に役立てていただけるものと期待している。

2.3 Linuxを利用した校内LANの構築と情報活用能力の育成（みなべ町立上南部中学校 鈴木 忍）

（1）概要

上南部中学校では、Linuxサーバを導入し、視聴覚室（コンピュータ教室）と職員室を繋げるとともに、Webサーバ、プロキシサーバ、ファイルサーバ、メールサーバ等のサービスを提供している。現在、技術家庭、総合的な学習の時間等での活用や学校行事等の画像データの共有等に活用している。特に、生徒一人ひとりにアカウントを発行し、電子メールの活用を図っている。また、誰でも操作できるようマニュアルの整備を徐々に進めている。

（2）地域シンポジウムの意義

シンポジウムでは100名以上の参加者に発表を聞いていただくことができた。発表当時課題としていた利用しやすい環境構築のための機器整備はできていないが、職員は操作等で困ることなく、シンポジウムの波及効果で思っていた以上に活用してもらっている。

2.4 IT活用でオープンソースを活用した校内ネットの構築と運用（田辺工業高等学校 尾花 敦）

（1）概要

現在、Linuxを用い校内ネットワークを構築するとともに、学校設定科目「ネットワーク技術」において、ネットワークの構築方法や運用方法について実習指導している。また、「マルチメディア表現」では、POVRAYを取り入れたCG制作実習やDOGAによる3DCGアニメーションの制作実習を行っている。

(2) 地域シンポジウムの意義

発表当日、研修室いっぱいの人々に発表を聞いていただいた。現在、Linuxの設定や立ち上げが容易になってきているため活用する人が増えてきている。シンポジウムをきっかけに、県立高等学校の情報部会でもLinuxの講習会をやることになっている。本校では、今年度2年実習と3年課題研究にもLinuxを取り入れた。

2.5 わかやまソフトウェアコンテストによる高度情報化社会を担う人材育成活動(株式会社和歌山リサーチラボ 山田俊治)

(1) 概要

将来の情報サービス産業界を担う人材育成のため設けられた「わかやまソフトウェア・CGコンテスト」(主催:社団法人和歌山情報サービス産業協会)は、平成19年度で16回目を向かえた。今年度、和歌山県、和歌山県教育委員会等の後援のもと県内小・中・高等学校や高専、大学、一般から幅広い応募(ソフトウェア部門41点・CG部門81点)があった。

(2) 地域シンポジウムの意義

田辺市内に企業を誘致し、地元採用を考えていただいているが、そのための人材育成が課題である。地域シンポジウムにおいて、コンテストの意義と成果や課題について知っていただくとともに意見交換をすることができた。このため、平成19年度からCGコンテストを復活させ多くの応募があった。現在、指導要領の改訂が進んでいるが、今後情報教育がどのように行われることになるか関心を持って見守っている。

2.6 県立学校事務室におけるIT環境とその活用について(日高高等学校 今井一欽)

(1) 概要

人事給与システム、財務会計システムは職員が慣れているシステムで、専用回線を用いており、セキュリティは万全である。旅費計算システムは、県内及び県外主要都市への旅費が自動的に計算されるため、誤りが少なく、出納機関連の事務処理効率が良い。現在トラブル無く運用されている。今後、自動計算される場所を増やして欲しい。CAD利用施設管理については、JW-CADを使用しているが、操作できる職員が限定されるため現在研修会を計画している。行政事務用パソコンは、学校単位では1台であり共同利用している。物品購入等で利用頻度が増している。

(2) 地域シンポジウムの意義

これまでシンポジウムに参加することは少なかったが、学校、大学、企業等からと多様であり、学校事務でどのようなシステムが動いているか、どのような取組を行っているかを知っていただく機会となった。

2.7 ICT活用できる教員養成の現状と課題(和歌山大学 豊田充崇)

(1) 概要

「学習指導におけるコンピュータ活用」において模擬授業を取り入れたのが平成15年度からである。初めは、大学内で実施していたが、学生がICT活用にばかり関心を向け、教科指導にどれ程役立っているのかわからなかった。平成17年～18年度の和歌山大学・和歌山県教育委員会「ジョイントカレッジ」の取組に、学生の学校現場での授業実践を位置づけ、指導主事から評価をしていただくことにした。その結果、学生は教科指導の在り方を含め考えるようになった。しかし、大学の教科教育法に実践的な科目が少なく、学生の経験不足は否めない。

(2) 地域シンポジウムの意義

参加者が、学校、行政、企業からと多様であり、教育学部でどのような取組を行っているかを知っていただく機会になった。教育におけるICT活用は3者の協力が不可欠であり、各々がどのような取組を行い、今何が課題と認識しているかを知ることで、補い合い協力が促進される。この意味で地域シンポジウムの意義は大きい。希望として、学生に教員がICTを活用している授業をもっと見せて欲しい。大学では、少なくともICT活用技術は卒業までに身につけさせておかなければならないと考えている。

3. おわりにー優れた実践から学ぶ場としての地域シンポジウムー

優れた実践は、実践した個人又は組織の力に依るところであるが、使用された予算や施設設備、組織やその構成員、周囲の人々の理解や考え、また地域の風土等(以下、環境と言う。)を無くしては成し得ない。このため実践が行われた地域に出かけ学ぶことは意義がある。視点を替えれば、実践報告を聞きそこから何を学ぶかは、参加者自身の環境にも依るわけで、実践が行われる環境の差異を意識することも重要である。これまでも多くの実践が報告されているにも関わらず何故波及していかないのか、実践報告の背後にある環境や参加者の置かれている環境も含め議論する必要があると考える。このような議論が行える場として、地域シンポジウムの果たす役割は大きいと考える。